

谷崎潤一郎「小さな王国」論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畑中, 基紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5288

谷崎潤一郎「小さな王国」論

畑中基紀

谷崎潤一郎の短篇小説「小さな王国」⁽¹⁾のユニークさは、地方都市の小学校の生徒たちによる、独自の通貨が流通する交換システムの整った「共和国」を創設する遊びが現実味を帯び、やがては担任教師までも巻き込んでいくストーリー設定上の獨創性にある。だが、その物語のタイトルが「小さな」「王国」であるのは、どういうことなのだろうか。そして、「王国」また「共和国」という喩が象徴するのは何であるか。本稿では、谷崎文学の重要なテーマの一つとして論じられながら、この作品に関してはほとんど適用されてこなかった、いわゆるプラトニズムに着目する視点からテクストを検証することで、こうした問題を考えていきたい。

1

この小説の主人公島昌吉は、お茶の水尋常師範学校を卒業以来約二十年の経験を持つ教師で、G県M市内の小学校で男子部尋常五年級五十名の生徒たちの担任である。赤ん坊を含む七人の子供と妻、そして老母を養う貝島の生活は苦

しく、「彼の収入よりも、彼の一家の生活費の方が遙かに急激な速力を以て増加する為に、年々彼の貧窮の度合は甚しくなる一方」で、その事を「始終苦に病んで」はいるものの、何の具体的な手だても立てられないでいる。

職場での彼は生徒たちに対して、「場合に依れば随分厳しい体罰を与へたり、大声で叱り飛ばしたりする事」があつても、「誰彼の区別なく、平等に親切に世話を焼」き、長年の経験から「児童の心理を呑み込んでゐる」、「正直で篤実で、老練な先生」という「評判」を得ていた。この「老練」という評価は、貝島自身の自負と自信の表現としてテクスト内でたびたび反復される。そしてその自信を支える教育者としての彼の信条は、厳しさと平等性の確保、すなわち倫理性の高さにあるというわけである。物語の中で唯一具体的に描き出される彼の授業風景が修身の時間であることが、この点を強調する。平生は「極く打ち解けた、慈愛に富んだ態度を示す」彼も、「修身の時間に限つて特別に厳格に」ふるまうというのである。

——そこで二宮先生は何と云はれたか、どうすれば一旦傾きかけた服部の家運を挽回することが出来ると云はれたか、先生が服部の一族に向つて申し渡された訓戒と云ふのは、つまり節儉の二字でありました。

ここで貝島が厳かに「力の籠つた弁舌」で説きつけるのが、「節儉」という徳目であるのは皮肉というほかない。今まさに家運の傾きつつあるのは貝島その人の家であり、したがって『節儉』という美德を至上命題とする人生設計はほかでもない、貝島自身のもの⁽²⁾に違いないからである。

しかしその日の授業は、貝島の教室に新たに転入したばかりの沼倉庄吉によって台無しにされる。「卑しい顔だちや垢じみた服装」ながら、「それ程学力も劣等ではないらしく、性質も思ひの外温順で、むしろ無口なむつゝりとした落

ち着いた少年」と当初貝島に印象づけたこの生徒は、わずかな時日でクラス全体を掌握した「毛色の違つた餓鬼大将」として彼の注意をひいていた。ただ、教場での沼倉は、「相当の出来栄え」ではあるが「始終黙々と机に凭つて、不機嫌さうに眉をしかめて居るばかり」であるという。その沼倉がこの修身の授業中に堂々と私語をはじめるのである。しかも貝島が叱責しようとする、他の生徒に「罪をなすりつけよう」とする。そのため「例になくムカムカと腹を立て、顔色を変へ」咎め立てる貝島に対して、「殆ど全級残らずの生徒が」沼倉を庇って自ら体罰を受けようとし、結果として沼倉を「懲罰する」ことすら出来なくさせてしまったのである。

正直に白状して、自分の罪をあやまりさへすれば、先生は決して深く叱言を云ふのではありません。それなのに
お前は、嘘をつくばかりか、却つて自分の罪を他人になすり付けようとする。さう云ふ行ひは何よりも一番悪い。

お前が自分の罪を後悔しさへすれば、先生はいつでも赦して上げる。しかし強情を張つて居れば日が暮れても赦しはしないぞ。

先生は罪のない者を罰する訳には行きません。沼倉が悪いから沼倉を罰するのです。

「罪」という語が執拗に繰り返されるこの場面で、貝島の怒りと憎悪の対象となるのは沼倉の、嘘をつき無実の罪を他人に押しつける行為である。すなわち、いわば貝島と沼倉が対決するこのシーケンスでは正義論的テーマが焦点化される。教場においては常に公正さの実現を目指し、正義の遵守を説く貝島を沼倉は平然と、しかし静かに挑発し、他の

すべての生徒がそれに同調する。こうした事態の進展に、貝島は驚愕させられることになるのである。

ところで、『節儉』という美德⁽²⁾を、つまり善という真理を教師が説き、生徒はそれを静かに拝聴すべきとする、貝島の教育思想が、おそらく前提としてゐる規範的な授業の構図に着目すると、その根底には一種のプラトニズムを見いだすことができる。『二宮尊徳先生のお話』すなわち物語Ⅱミュートスによって真理を語り、生徒たちの魂を呼び覚ますようにする方法の背景には、生徒は自らが無知であること、あるいは間違っていることを知らないが、「ほんとうに自分（とその魂）を優れたものにする⁽³⁾ことを知るなら、必ずそのことを欲し行⁽⁴⁾う」という、ソクラテス的な「楽天主義」の思考がみとめられる。竹田青嗣の言葉を借りれば、『魂のほんとう』を求めることに人間の『生のほんとう』があるというプラトンの思想⁽⁴⁾である。そこで竹田がとりあげるのは、たとえば、徳や正義の概念を極端に聖化するソクラテスの哲理は、それらを「人間の欲望の自然性とまったく背反的なもの」にし、「結局生身の人間が近づくことのできない空疎なロマン的名辞⁽⁵⁾」にしてしまうという、『ゴルギアス』（四八二以下）におけるカリクレスの、ソクラテスに対する反駁と、それに対するソクラテスの反論であるが、竹田によれば、こうしたカリクレス的異議の核心は、「理想的概念は、ただその一般的な知によってだけでは、個々の人間の中で生きられる生の目標には決してならない⁽⁶⁾」という点にある。したがって、この異議はまた、修身の授業に臨む貝島の教育理念にも向けられ得るものであり、その理念の根底をなす「ロマン的」理想主義の存在と、そこから発する彼の熱のこもった言葉が、彼の信ずるほどには生徒たちの「魂」に響いていない可能性を示唆する。

あたかも完全、不変の美德としての真理を所有する賢者であるかのようにふるまい、その真理を説き、正義を実現する。おそらく貝島にとって、そうしていわば、教室という集団の中で最善の智者として無知な野生たる子供たちを訓導することは、プラトンの『国家』に言うところの哲人王⁽⁷⁾、すなわち善のアイデアに最も近づき、それを望見し得る位置に

立つ支配者にも比する〈王権〉を授かるものとして教室を統治するようなものである。「小さな王国」という小説のタイトルはそれ自体「国家」の意味を内包するが、貝島にとって、彼自身が自ら体現しつつあると信じる理想の教室とは、「国家」が説くような、プラトンの精神の王国なのである。⁽⁸⁾ 修身の授業における貝島の驚愕の実体は、そのような意味で揺るぎないものと信じられた権威の、彼にとっては思いもよらぬ脆弱さが露呈したかのような衝撃なのではないだろうか。

しかし、そのような一種の全能感を疑うこともなく保持できる心性にはやはり、ナイーヴさが伴うことを避けられない。教師と生徒の間に学校教育という制度のためにもたらされる非対称の権力関係によって強いられた生徒の従順さや、教師の「お話」をありがたく〈静聴〉する身振りの虚構性には思い至らずに、みずからの優越性への〈楽天主義〉的確信や、そうした制度によって保証された権威、また権力にアイデンティティを過度に求める姿勢からは、逆に当の本人の卑小さが強く表象されることになる。卑小なる王がそこでは絶対的な権力を持って君臨する学級という小さな王国⁽⁹⁾、それが、この小説の表題「小さな王国」の意味するところである。

2

そのようなナイーヴさに支えられたもろい理想主義を結局は生徒に嘲笑され、蔑視を浴びることになる貝島だが、彼には確かに、目の前の事象の意味するところを捉えきれないという一面が認められる。たとえば、運動場での生徒たちの「戦争ごっこ」の様子に対する、また、「特別の注意」を払いつつ行った沼倉の授業態度に対する、彼の教員としての自信に裏打ちされたはずの「観察」の結果として、沼倉とは「教師を馬鹿に」したり、他の生徒を「煽動」する、あ

るいは「組中の風儀を紊」すといった類いの不正な行為をしない生徒と判断していた点などが、その典型例と言える。このことが意味するのは、つまり、そのような叙述によってテクストが描き出すのは、「物事の表層部分しか見ていない⁽¹¹⁾」というべき貝島の本当の資質がもたらす、彼の理想と現実との間の齟齬である。

テクスト内で「老練」という貝島の自己評価が反復されることもまた、同様に機能する。共和国を急速に形成していく生徒たちの暴走を実際には統御できず、そんな貝島を「馬鹿にし出し」た子供たちから「意地の悪い真似ばかり」されることになるというストーリー展開にともなつてこの語が反復されることで強調されるのはむしろ、彼の自信と自負とが実際には何の内省を経て得られたものでもなく、たんに世間の「評判」を無批判に「内面化すること⁽¹²⁾で支えられた」ものにすぎないということであり、結末近く、現金が払底して今日赤ん坊に飲ませるミルクの入手にも困った貝島が、「洋酒屋の悴」から沼倉共和国の紙幣でそれを購入する手はずを整えて、「己はやつぱり児童を扱ふのに老練なところがある」と「腹の中で云」う場面における同じ語のアイロニカルな使用にそのことがよく表れていると言つてよいだろう。同時に、そうした「老練」の反語的意味合いの反復によって強調されるのは彼の「おめでたさ⁽¹³⁾」である。

全級の生徒を憎服させて手足の如く使ふと云ふこと、単にそれだけの事は、必ずしも悪い行ひではない。沼倉と云ふ子供にそれだけの徳望があり、威力があつてさうなつたのならば、彼を叱責する理由は毛頭もない。

貝島の発想においては、生徒の集団の中で「餓鬼大将」が専制的な支配者のようにふるまつたとしても、他の子供たちがその徳望によって服従しているのだと貝島に認められるのならば、それはむしろ評価すべき行為である。だが彼には子供の徳望の定義も、その有無を認定する規準もない。むしろ、修身の授業時に、全生徒が沼倉を庇つたという出来事

を体験したこと自体が、彼にとっては、沼倉が「徳望」を所有していることの証明となる。沼倉に「徳望」があるならば子供たちは彼にひれ伏すだろう、そして実際に子供たちが彼にひれ伏したのは沼倉に徳望がある証拠だ。論理的にはこれがたんなる同義反復にすぎないことはいうまでもない。しかし貝島自身がこの論証の無意味さに思い至ることはない。自分のクラスの生徒でもある長男の啓太郎の口から、その出来事の〈真相〉を聴き取り、生徒たちの行動が沼倉に対する「心服」によるものと理解した貝島の見せる思考と行動は、そうした彼の「おめでたさ」をよく示している。

「啓太郎の話す意味を補つて見ると、大体かう云ふ事情であるらしかつた」。テキストに言述される〈真相〉はこのように貝島の解釈によって再構成されたものである。そこでは、沼倉が級友たちをそこまで「悦服」させた要因は沼倉の、「勇気と、寛大と、義侠心とに富」み、「弱い者いぢめをしない」という行動規範を裏打ちする「凛然とした意気と威厳」、そして「度量の弘」さにあり、しかも「多くの場合沼倉の為す事は正当で」、「弱い者いぢめをしたり、卑屈な行ひをしたりする」「部下」には、「極めて厳格な制裁を与へ」るなど、彼の実際の行動にあるという。啓太郎の「話」には本来、啓太郎の観察力や理解力の限界に起因するバイアスが多分に含まれるはずだが、そのことを貝島はまったく考慮せず、しかも、全級を瞬く間に掌握することを可能とした沼倉の統治戦略に、彼にとっては未知の手法や発想があり得ることも想像が及ばない。要するに、自らの理想とする教室の〈統治者〉像を無条件に適用し、沼倉は「正義」の人であると、その評価を一気に単純化するのである。

自分は二十年も学校の教師を勤めて居ながら、一級の生徒を自由に治めて行くだけの徳望と技倆とに於いて、此の幼い一少年に及ばないのである。

貝島のナイーヴな心性は、たとえ相手が子供であっても、いったん「徳望」を認めてしまえば、とたんにこれを賞賛してしまう点に顕著に表れる。のみならず、ここで彼の思考は実に奇妙な論理を導き出すのだ。

われ／＼の生徒に対する威信と慈愛とが、沼倉に及ばない所以のものは、つまりわれ／＼が子供のやうな無邪気な心になれないからなのだ。全く子供と同化して一緒になつて遊んでやらうと云ふ誠意がないからなのだ。だからわれ／＼は、今後大いに沼倉を学ばなければならない。生徒から「恐い先生」として畏敬されるよりも、「面白いお友達」として気に入られるやうに努めなければならない。

沼倉が、生徒たちの間に自分以上の「威信」を保ちつつこれを統率できるのは、沼倉が正義の人であり、かつ子供だからだ。ゆえに自分も子供のようにふるまえばよい。そうすれば生徒たちを心服させクラスを統治できる。こうした幼稚な擬似三段論法がここには含意されている。口高佳紀の指摘するように、「面白いお友達」という発想に同時代の教育思潮の動向の反映が認められるとしても、これでは、そもそも貝島が実践していると信じていたはずの、教室という王国の哲人王としての教師像が根底から崩れてしまっている。自分以上に正義を実現しているとろくな検証もせずに見なした、いわばあらたな有徳者の出現に際して、自らもあっけなく「心服」してしまう。その幼稚な心性によって貝島の理想の王国は瞬時に雲散霧消し、彼は王の地位を失うのである。

そこで先生は、お前が此の後ますます／＼今のやうな心がけで、生徒のうちに悪い行ひをする者があれば懲らしめてやり、善い行ひをする者には加勢をして励ましてやり、全級が一致してみんな立派な人間になるやうに、みんな

お行儀がよくなるやうに導いて貰ひたい。此れは先生がお前に頼むのだ。

子供に「氣に入られる」ために貝島がとる手段とは、いわば「王国」の王権を沼倉に委譲することに等しい。ここで貝島が沼倉に依頼するのは、生徒たちの素行を「観察」し、しかもそれを報告するのではなく、即刻裁き、罰せよということである。教室空間の正義を司る権威のみならず、驚くべきことに、それを実現するための権力をも授け渡してしまう。だが貝島自身は、ことの重大さに気づいていない。沼倉を「巧みに善導した」⁽¹⁵⁾自分はやはり「老練」であると、「愉快」がるのみである。しかし、この「学級という国家の権力」の委譲により、教室空間は沼倉の共和国へと急速に組み替えられていく。そのこと自体が、彼の王国には自らを国民と認める〈民〉が不在であったこと、すなわち彼の〈国家〉論は実は誰の支持も得ていなかったことを示す。王自らが教唆した革命によって、王の信じた正義の王国は、その虚像ぶりを顕わにしたうえで、一気に崩壊するのである。

3

〈王権委譲〉の翌日から、「教室の風規は、気味の悪いほど改ま」る。貝島の依頼、というより指示を忠実に実行しはじめた沼倉は、「彼独特の標準の下に」生徒たちの操行を嚴重に監視、評価しつつ、「罰則」を次々と増やし、「制裁の方法」を複雑化していく。監視の目を行き届かせるための「探偵」や「裁判」制度を設け、自らを「大統領」とする共和国の法体系を整備していくのである。さらには、「先生から指名された級長は其方除けにされ」、「監督官」「出席簿係り」などのいわば行政官も出現し、王国時代の統治機構は完全に骨抜きにされる。

やがて「大蔵大臣」が任命されて「お札」の発行が開始される。

総べての生徒は、役の高下に準じて大統領から俸給の配布を受けた。沼倉の月俸が五百萬円、副統領が二百萬円、大臣が百萬円、——從卒が一萬円であつた。

俸給支給額によって厳しく格付けされた階級社会の出現である。だが、その紙幣による所有品の売買が始まり、「両親から小遣ひ錢を貰つた者は、総べて其の金を物品に換へて市場へ運ばなければいけないと云ふ命令」を大統領が発すること、市場交換が活発化すると、「沼倉共和国の人民の富は、平均されて行」き、「貧乏な家の子供でも、沼倉共和国の紙幣さへ持つて居れば、小遣ひには不自由しな」くなくなったという。啓太郎が貝島に語るところによれば、「みんなが大統領の善政(?)を謳歌して居る」という、いわば子供たちにとっての「ユートピア社会」⁽¹⁶⁾の出現である。

すべての生徒が平等に交換に参加でき、この市場が無ければ入手できない、以前なら贅沢品として諦めねばならなかつた物品を購入できる機会と、またその資力を蓄える方法を得られたという意味では、一見、いわゆる「最大多数の最大幸福」を実現したかのような状況が出現している。しかも、所有することになる物品が、使用価値を上回るほどのさらなる交換価値を持つ場合には、次の交換によってまた新たな「幸福」がもたらされることになる。その効用のため、再交換を目的とする、いわば投機的な売買も行われるだろう。つまり、沼倉共和国では、経済活動における自由を最大化することで、可能な限り不平等を是正しているのである。その意味において、少なくとも子供たちにとっては、王国時代よりもより現実的な正義の実現が起こりつつあるのである。それゆえ、もしこの状況がいつまでも続くならば、確かに沼倉の統治は彼等には「善政」であり、一種の「ユートピア」の実現であろう。そして、そこでは明らかに、貝島が

説く、すなわち、教育というコンテクストにおける、いわば社会の共通善としての正義が前提とする幸福とは異なる幸福の原理が子供たちによって選択されているという意味で、テクストにおける王国と共和国との間の対立関係には、正義論的テーマの対立が内包されているのである。

ただし、この〈ユートピア〉は、貝島が生活苦に喘いでいるような、大人たちの現実の貨幣経済からは切断された、閉じた通貨システムによって成立しているものである以上、小仲信孝の指摘するように、「本来的な意味での富の平等を実現したわけではない」⁽¹⁷⁾ことも確かである。子供たちの市場で交換される物品とは、

西洋紙、雑記帳、アルバム、絵ハガキ、フィルム、駄菓子、焼芋、西洋菓子、牛乳、ラムネ、果物一切、少年雑誌、お伽噺、絵の具、色鉛筆、玩具箱、草履、下駄、扇子、メタル、蝦蟇口、ナイフ、万年筆

これらに加えて、「大正琴」「空気銃」など、要するにあくまで「彼等の欲しい物」に限られ、生存を維持することを目的として購入される生活必需品は、基本的に除外されている。そのため、現実には極貧の家庭の子がここでどれだけ資産を殖やしたとしても、家族の生活を救うことは出来ない。貝島の息子啓太郎がよい例である。端的に言えば、共和国の通貨によって生活していくことが出来ないことは自明である。

また、そもそも税金も預金制度もなく、大統領を含む全員の給与がつねに新紙幣の発行によって支給されるこの共和国では、時間とともに通貨発行量が一方的に増大するのみであって、大統領が強制収用でも行わない限り極端なインフレ状況に陥ることは避けられない。だが、それを行うこともまた、著しく通貨の信用を落とし、この通貨システム自体の破綻を招来しかねない。つまり、大統領にもインフレを調整する手段がない。共和国通貨を外部社会の通貨、すなわ

ち日本円と交換することもできない以上、長期的に見れば、共和国円は通貨としては機能し得ないのである。

したがって、沼倉共和国が実現し得たかに見える〈ユートピア〉性の要諦は、生存のための労働をしなくても、消費の欲望をどこまでも追求できるかのような錯覚をその〈国民〉に起こさせる点にある。結末の場面で貝島がこの市場に参加せずにいられなくなるのもこのためだ。言い換えれば、共和国の市場がもたらした平等性とは、子供たちが体験したことのない活発な「消費ゲーム」に「参与する可能性」の平等な分有であり、その意味で「誰もが平等に欲望する人間になれる」⁽²¹⁾「ゆえの〈ユートピア〉」なのである。沼倉は子供たちの消費への欲望を統御し、物惜しみを強いる節制意識や貧しさという環境によって余儀なく抑制されていたその欲望を解放させた。「餅菓子」をむさぼり食う啓太郎の姿がそれを象徴している。

だが、そうした平等性を子供たちにもたらす沼倉の正義の実現が、貝島が教室で説いていた「節儉」に代表されるような共通善としての正義に違背するものであることは言うまでもない。したがって、たとえば、「餅菓子」で空腹を満たす程度の啓太郎の小さな幸福も、貝島には容認できない不正である。貝島と沼倉が同じ名前（シヨウキチ）を与えられている点はずとに指摘されているが、そのことが示唆する二人の対称性は、いわばそれぞれが統治する〈国家〉の理念として鋭く対立する正義論的テーマにおいて際だつことになるのである。

4

子供たちにとって、また貝島にとっても沼倉とは正義の人であった。だが共和国大統領就任後の沼倉は、その破格の報酬によって自らを富ませ、「自分の欲しいと思ふ物を、遠慮なく部下から買ひ取り、裕福な家庭の子供たちの持つ

高額な玩具もたびたび「徴発」する。彼の創設した共和国のシステムは、まず第一に彼自身の利益を追求するためのものであり、その意味で沼倉の行動には、〈正義とはより強い者の利益〉というソフィスト的論理⁽²³⁾が露呈する。この通貨システムを守るために、その存在を大人に「若しも云付ける者があつたら厳罰に処する旨の規定」を作り、「探偵」が監視をする。こうして、専制的で、子供たちにとってきわめて厳格な沼倉共和国の法と秩序は、沼倉および彼に付き従う子供たちの消費の快楽と欲望を充足しうる体制を維持するためのものへと変質していくのである。

『国家』では、その民主制批判において、欲望を解放し続けるという意味での自由の無制限の発動は、その反動として隷属への指向を生み僭主政治への逆転がもたらされると論じているが、このいわゆる「自由のパラドクス」⁽²⁴⁾は、沼倉共和国においても見いだすことができる。子供たちが現実の境遇における経済的条件から自由に、その欲望の充足を続けていくためには沼倉から支給される俸給が不可欠である。それゆえ、子供たちにとって、この消費の自由、欲望充足の自由をどこまでも守るためには、共和国の現体制が存続し、また自分が沼倉から疎まれないこと、あるいは、「法」に触れて処罰されないことが望ましい。一方それは、自らの欲望充足を約束する今の地位を含めて、やはり体制強化を望む沼倉の利害と合致する。こうして彼の大統領としての地位は安定を保つことができる。いわば僭主の誕生である。つまり沼倉共和国の専制的独裁体制は、子供たちがむしろ積極的にその存続を求めるところのものである⁽²⁶⁾、それゆえに皆が「謳歌」する「善政」なのである。

しかも、皮肉なことにこの沼倉共和国通貨の市場は、貝島にすれば、彼の現実の窮状を、当座だけでも救うことが出来る可能性を持っているように見えてくる。月給日の二日前に「一文の銭もな」く、「勘定が溜つて居る」ために赤ん坊のミルクを入手することもできず途方に暮れている貝島が、「沼倉さんの家来になる」ことによって通貨を入手し、この市場から調達しようとするのはそのためだ。テクストの物語世界内ではけっきょく、〈節儉〉の美德も貝島の実生

活には役に立たず、少くとも貝島にとっては沼倉の作り上げたシステムの方に確かな実効性があるということになる。ではこの「小さな王国」は、貝島の正義が沼倉の正義に敗北し、専制的な秩序のもとに子供たちの欲望を解放する、いわば〈悪〉のシステムに理想主義的な精神王国が席卷される物語だと言えるのだろうか。

もちろんことはそう単純ではない。そもそも貝島の理想とした哲人の統治する教室王国も、その本質は集団主義的である。そこでは、優れた教師が、厳格な権威のもとで理想の世界を教室の空間に実現することを目指す一種のユートピア思想のもと、彼自身をすべての尺度として、教室全体が整然と、従順に付き従うことを要求する。⁽²⁸⁾ この意味で貝島は、教室の統治に関して、いわば無制限的な主権論者であった。つまり、彼の指向するのもまた、いわば独裁的な王国の専制君主であり、この点は沼倉と共通する。しかし、生徒たちにとっては修身の時間に見られるような、無垢なる子供たちの集団としてのふるまいを強制され、家族もろくに養えない中年男の実効性のない理想を押しつけられる抑圧された状態よりも、沼倉共和国通貨による経済ゲームに興じている間にこそ、生きた時間のリアリティを感じられたはずである。

プラトンの精神の「王国」においては、この世の外にある完全なる實在、すなわちイデアこそが、教室における貝島の権威と正義を支える根拠となる。だが、よく知られた洞窟の⁽²⁹⁾ 比喻は、たんに洞窟の囚人たる私たちにはそうした世界の絶対的な真実が見えていないということのみではなく、むしろ、それゆえにこの世界の中で私たちが見ていると信じる現実には根拠を欠いたまま成立している⁽³⁰⁾ ことになるという点を明らかにするものである。貝島の説く「節儉」の美德のような理想的行為の正しさを証明する、手ごたえのある根拠は子供たちには実感できない。一方で、沼倉の快樂主義指向がこうした徳を認めないことは確か⁽³¹⁾ であり、その意味で、貝島によって立つ理想主義の立場から見れば明らかかな不正である。ところが、その貝島も生活苦のために、自ら不正と見なす沼倉の通貨システムに参加せざるを得なくなる。それでも、彼の実生活における不幸がこのまま解決するとは考えられない。沼倉もまた、その恣な欲望充足の姿が子供た

ちには幸福に見えるとしても、実際には他人の財に全面的に依存しているものにすぎない。はたして、真の〈幸福〉は、貝島、沼倉、子供たち、いずれにあるのか。正義論的対立は解消せぬまま、テクストは答えを提示しない。問いは読者に投げかけられているのである。

注

- (1) 初出時は「ちひさな王国」『中外』一九一八年八月。なお、本文の引用は『谷崎潤一郎全集 第六卷』中央公論社、一九八一年一〇月、による。ただし、漢字は適宜新字に直し、ルビは省略した。
 - (2) 小仲信孝「欲望する子どもたち——『小さな王国』論」、『跡見学園女子短期大学部紀要』三三、一九九六年二月、一六頁。
 - (3) 竹田青嗣『プラトン入門』筑摩書房、一九九九年三月、一一七頁。
 - (4) 右に同じ。
 - (5) 竹田青嗣『プラトン入門』一一五頁。
 - (6) (3)に同じ。
 - (7) 『国家』四七三D、四八〇A参照。
 - (8) 藤沢令夫によれば、正義論と国家論とが、『国家』の二つの重要な主題であり、「国家論を通じて〈正義〉の何であるかを問い、それと幸福との関係を問うこと、これが、議論の進行の実態によって示される本篇の中心テーマである」(藤沢「解説」『国家』下、岩波書店、一九七九年六月、四六一〜八頁)。また『国家』では、正しい仕方で建設された完全な国家が具える四つの徳目として、知恵、勇氣、節制、正義を挙げているが(四二七E)、これらには貝島の信奉する徳目と、本稿で後に述べる、貝島の長男啓太郎が称賛する沼倉大統領の美德とがともに含まれている。
- ただし、谷崎潤一郎がこの作品で、いわば『国家』を小説化したといったたぐいの主張をすることが本稿の目的なのではない。彼自身が本作執筆時点までに『国家』や『法律』などを、どれほど深く読んでいたかについては、確定的に検証することがほとんど不可能であるといつてよい。とはいえ、以下の三点から一定の蓋然性は認められる。①潤一郎の小説「神童」(一九二六年五月『中央公論』)の中に、主人公が Bonn's Classical Library 版の「プラトオ全集」を六冊まとめて衝動買いし読み耽る場面があり、そこに『テイマイオス』の一節が引用されること。(全集第三卷二八五頁参照)②谷崎潤一郎、和辻哲郎、後藤末雄に

よる「春宵対談」(『塔』一九四九年五月)において和辻が次のような発言をしている。「鶴沼の東屋に君が来てゐた時、ぶらつと訪ねて行つたら、部屋に英訳のプラトン全集が置いてあつた。こんなものをどうするんだときくと、僕だつて読むよと君が云つた。(略)それは大正五六年頃だね」／「さうだとすると確かにあのときプラトンを読んでゐたんだね。その掴み方は我々の仲間よりもしつかりしてゐると思つた」(二〇〇～二〇一頁)。東屋には大正七年に長期滞在しており、実際にはこの時のことだつたとすると、「ちひさな王国」執筆期とも重なることになる。③「早春雑感」(一九一九年四月『雄弁』)をはじめ、潤一郎がイデア論に言及した例がいくつかあること。ちなみに同時期の『国家』の邦訳では木村鷹太郎による『プラトオン全集 卷二』(真善美協会、一九〇六年九月)に「理想国」として収録されているものがよく知られている。こちらを読んだ可能性も否定はできない。

なお、潤一郎のプラトオンへの言及については、細江光『谷崎潤一郎——深層のレトリック——』和泉書院、二〇〇四年三月、三八二～三頁の注(12)を参照。

(9) ポパーは『国家』の哲人王を、真理の所有を誇る全知全能に近い「全体主義的半神半人」と批判する。カール・R・ポパー『開かれた社会とその敵 第一部 プラトンの呪文』内田詔男・小河原誠訳、未來社、一九八〇年三月、一三六頁参照。また『国家』五四〇Cも参照。

(10) 日高佳紀はこの小説を論ずる際に「学級王国」という用語を使用しているが、日高の場合は〈大正自由教育〉との関連からその概念を導入しており、本稿ではその点が異なる。日高佳紀「〈改造〉時代の学級王国——谷崎潤一郎『小さな王国』論——」『日本近代文学』五九、一九九八年三月、四三～五六頁参照。

(11) 金森裕子「谷崎潤一郎『小さな王国』論——子供観の解体——」『國學院大學大学院文学研究科論集』三〇、二〇〇三年三月、二二頁。

(12) 森岡卓司「谷崎潤一郎『小さな王国』の論理」『文芸研究』一五一、二〇〇一年三月、八一頁。

(13) 小林幸夫「『小さな王国』論——二人の〈しやうきち〉」『作新学院女子短期大学紀要』一〇、一九八六年十二月、三九頁。

(14) 日高「〈改造〉時代の学級王国」五〇頁。

(15) 右に同じ。

(16) 小林幸夫「『小さな王国』論」四二頁。

(17) 小伸信孝「欲望する子どもたち——『小さな王国』論——」一三頁。

- (18) 沼倉共和国通貨のこうした欠陥については、すでに日高佳紀らの指摘がある。日高「〈改造〉時代の学級王国」五三頁参照。
- (19) 大統領から子供たちに課せられた共和国での業務はあくまで遊びである。沼倉に対して恭順の姿勢さえみせていけば、たやすく遊び道具やおやつを得られるゲームとってよい。小林幸夫「『小さな王国』論」四四〜四五頁参照。
- (20) 森岡卓司「谷崎潤一郎『小さな王国』の論理」七五頁。
- (21) 小仲信孝「欲望する子どもたち」一四頁。
- (22) 宗像和重「谷崎潤一郎『小さな王国』『国文学』三〇―三二、一九八五年一〇月、一一四頁。
- (23) 『国家』三三八C。また『ゴルギアス』四八八B参照。
- (24) 『国家』五六四〜五六六。
- (25) ポパー『開かれた社会とその敵 第一部 プラトンの呪文』一二八、二八九頁参照。
- (26) 「暴政は明らかに、短期的に見れば利点をもっている。すなわち、安定性、安全性、生産性という点で利点をもっている」ハ
ンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、筑摩書房、一九九四年一〇月、三五〇頁。
- (27) 『国家』におけるプラトンの国家論について、ポパーはその「徹底的な集団主義」を批判している。ポパーによれば、そこでは正義とは「最善国家のためになるもの」と同義である。そしてそれは「厳格な階級区分と階級支配の維持によってすべての変化を阻止すること」であり、したがってプラトンの正義に対する要求は、彼の「政治綱領を全体主義の水準のままに置く」ものである、とする。ポパー『開かれた社会とその敵 第一部 プラトンの呪文』九九〜一〇〇頁。
- (28) 「社会全体の青写真を用いて理想国家を実現しようとするユートピア的な試みは、少数者の強度に中央集権化された支配を要求するものであり、それゆえ独裁へ導きがちな制度である。」「実際、不合理な異論を抑圧することが彼の仕事の一部になるであろう。だがこのことによって、彼は常に合理的な批判をも抑圧せざるをえない。」ポパー『開かれた社会とその敵 第一部 プラトンの呪文』一五九頁。
- (29) 『国家』第七巻。
- (30) 納富信留「プラトン 哲学者とは何か」日本放送出版協会、二〇〇二年一月、七一頁。
- (31) 天野正幸「正義と幸福 プラトンの倫理思想」東京大学出版会、二〇〇六年三月、一一七頁。

(はたなか・もとき 経営学部准教授)